



(東京東北部・東京東南部)

# 東京・汐留遺跡

1 所在地 東京都港区東新橋二丁目

2 調査期間 一九九一年(平3)六月～一九九三年七月

3 発掘機関 汐留地区遺跡調査会

4 調査担当者 滝口 宏・玉口時雄・吉原健一郎・段木一行・J.E.キダー・中津由起子・丑野 毅・小田静夫・植木真吾・中山経一・長井光彦・新里 康

5 遺跡の種類 近世都市(大名屋敷)跡・鉄道施設跡

6 遺跡の年代 近世・近代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

汐留遺跡は、JR新橋駅から南東へ約三〇〇m離れた旧国鉄汐留貨物停車場跡地に位置し、約二万四〇〇〇㎡の広さを有している。当地は近世初頭まで、江戸前島と称される半島の先端部分に位置する海岸地域であった。寛永年間(一六二

四～四四)に埋め立てが開始され、寛永九年には信濃飯田藩脇坂家下屋敷、同一六年には出羽山形藩保科家、同一八年には陸奥仙台藩伊達家がそれぞれ屋敷地を拝領し、大名屋敷として土地利用が開始され、明治時代に至るまで続いた。明治時代になって新橋―横浜間

に鉄道が開通すると、交通の拠点となり近代化の一翼を担った。当調査会が調査したのは、新橋駅から新交通システム(ゆりかもめ)建設部分に相当し、調査面積は約二万七〇〇〇㎡である。調査区は仙台藩伊達家上屋敷・会津藩保科家下屋敷・江川太郎左衛門大少砲習練場にまたがり、建物基礎・屋敷境・上水施設・地下式坑・配水施設などの遺構や、豊富な陶磁器の出土など、近世大名の江戸での生活を知る上で重要な成果を残している。今回紹介するのは、桶・曲物などの木製遺物や上水施設(木製)構築材の一部に残された墨書文字資料である。上水施設は、導水のための木樋と汲み上げ・方向転換のための井戸からなる。木樋は井戸から井戸までの間を一つの遺構としてとらえている。井戸及び木樋には通し番号を付した。

8 木簡の釈文・内容  
二五号土坑

- (1) 「上 納豆」
- (2) 「□□の芝」

径160×厚5 061

061

一〇九号井戸

(3) 「□□武村□□」

径199×高7 061

四号木桶

(4) 「△ □□□六寸」

061

八六号木桶

(5) 「いの六」

061

四三号木桶

(6) 「い一 十四」

061

二八号木桶

(7) 「又」

061

二七号木桶

(8) 「又」(朱)

061

(1)(3)は、曲物の蓋。納豆などの食品が入れられていたと想定している。(1)には樹皮製の摘みが付く。(2)は、手桶(口径120mm・底径95mm・高244mm・側板厚6mm・底板厚10mm)。墨書は八枚で構成される桶

側板外面にある。調査地一帯は、芝あるいは芝口と呼称されていたので、地名と考えるのが妥当であろう。釈文は「□□の芝」としたが、文字の始まりは不明。

(4)～(8)は、上水施設を組み上げるための目印・符号的なもので、いずれも木桶の蓋にあたる部材の端部に書かれている。こうした墨書は各上水の系統ごとに様々なものがみられるが、遺存状態がよく、代表的なもののみを紹介する。(4)は寸法と推測される。(5)の部材の反対側の端部には「いの五」と書かれている。おそらくこの系統の木桶の部材は「いの一」に始まる統一した記号が用いられていたと考えられる。

他に、一八世紀前半から一九世紀初頭の九五号井戸桶の外面に鬼らしき絵がある。顔が横向きであることから、井戸桶製作時に書かれたのであろう。井戸桶は多く検出されているが、絵が書かれたものはこの一点だけである。一八世紀後半は、天明四年(一七八四)、寛政六年(一七九四)、寛政八年と火災が多発し屋敷も焼失しており、「火除け」や「魔除け」的な意味を込めたものであろう。

## 9 関係文献

汐留地区遺跡調査会『汐留遺跡』(汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査概報 一九九四年)

同『汐留遺跡』(汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書 一九九六年)

(新里 康・長井光彦(株式会社武蔵文化財研究所))

2000年出土の木簡

